

伊勢と俳諧

柏崎順子

これまで江戸初期出版界の様相について、いわゆる江戸版の調査を通して京都と江戸の書肆の動向やその関係性について考察を重ねてきた。加えて前稿では同時期の出版界における古浄瑠璃の在り方についても検討してみた⁽¹⁾。漢籍や仏書といったいわゆる物の本とは一線を画する商品として登場してきたこれらのジャンルについて検討を加えることが、当時の出版界の考察にあたっては重要な意味をもつと考えられるからである。

仮名草子は、いわゆる物の本とは一線を画す、娯楽に供するような新たな範疇の商品として登場してきたものであることは間違いない。しかし同様に娯楽に供する範疇に属する古浄瑠璃正本とは、また微妙に異なる位置付けがなされていたようである。京都では古浄瑠璃と仮名草子を出版する書肆は異なっており、その両方を出版するという書肆はない。古浄瑠璃は、山本九兵衛のような、草子屋・浄瑠璃本屋といわれる書肆が専門に手がけるのに対して、仮名草子を出版する書肆は物の本も出版するような書肆が手がけている。江戸においては、仮名草子はいわゆる江戸版といわれる独特の造本様式を持つ本として出版され始め、万治・寛文期に新たに登場してきたごく限られた書肆によって出版されている。松会や本間屋、山本九左衛門といった書肆である。古浄瑠璃は、当初は仮名草子を出版する書肆とは異なる書肆が手がけていた。通油町の升屋や吉田屋、日比谷横町の又右衛門や又左衛門等といった書肆である。もともと江戸の場合は山本九左衛門のように、延宝期になると仮名草子の出版をほとんど行わなくなるかわりに古浄瑠璃正本の出版を開始する書肆も存しているが、これは延宝期以降の出版界全体に生じている再編のなかで生じ

たことである。万治・寛文期までの京都と江戸の書肆における古浄瑠璃と仮名草子の位置付けの相違は、出版界における両ジャンルの質的な相違を物語るものである。そのように古浄瑠璃とは一線を画す仮名草子にいわゆる江戸版というものが存在することは、仮名草子の本質的な有り様を示唆する現象としてとらえることができるのである。

ところで江戸初期出版界の様相を考察するにあたっては、京都と江戸という関係に加えて、そこに伊勢を加えての構造化が必要ではないかという見解に至っている。伊勢には、古くから暦の印刷のための技術と職人が存していたばかりでなく、浄瑠璃や説経節の太夫等も多く輩出した場所柄から、そのような芸能を、書物として商品化していくという発想が生まれやすい土壌が存していたと考えられるのである。そのように位置付けられる伊勢という場所をあらためて考えてみると、そこは近世初期から盛んになり、最も近世的ともいえる文芸と深い関わりのある地であることに思い当たる。俳諧である。筆者は初期出版界の様相を京都・江戸・伊勢という地を結んで考察していくにあたっては、そこに「俳諧」というキーワードを持ち込む必要があると考えている。本稿は、初期出版界における伊勢と俳諧に関わる問題において、かねてより気になっていた事象をいくつか取り上げ、検討を加えることを意図するものである。

伊勢と俳書出版

伊勢における俳諧の歴史は古く、注目すべきは、慶安年間には伊勢において俳書の出版が行われていたことである。いわゆる田舎版ということになるが、田舎版としては群を抜いて早い例といえよう。刊記から慶安ごろの出版であることが確認できる伊勢版は、次の五本が管見に入っている。書名のあとに刊記を付す。

- 慶安元年『世中百首』——慶安元年五月吉旦／於勢州山田開板之
- 慶安二年『望一千句』——慶安二年八月上旬／於伊勢山田開板之
- 慶安三年『伊勢山田俳諧集』——於伊勢山田八日市開板／慶安三年仲春吉日
- 慶安三年『三社託宣抄』——慶安庚寅正月日／勢州山田松本清房謹刊行
- 承応二年『永平和尚業識函』——承応二年癸巳八月吉日／勢州山田中世古／若井瀬兵衛刊行

この五本のうち、三本が俳書である。近世初期の伊勢俳諧については越智美登子「初期伊勢俳壇の研究」に詳しい^②。それにつけば、「守武を生んだ伊勢の地には、京俳壇が京貞門成立以前の未分化な状態であったとき既に、守武以来の古い伝統と、京俳壇に優るとも劣らぬ実力を持つ強固な俳壇が形成されていた」のであり、さらに「伊勢俳人たちは、その伝統と実力を背景に、独特の独立自尊意識を持ち、『犬子集』以後全国俳壇の指導権を掌握した京俳壇に対しても、追従することはなかった。」という。そしてそのような姿勢の証として貞門直系の俳書等にはほとんど入集せず、万治二年『伊勢俳諧発句帳』、寛文二年『伊勢正直集』、寛文八年『伊勢踊』等、伊勢を書名に冠した一連の選集を次々に刊行したり、『毛吹草』その他の京、貞門派の俳諧作法書が刊行され、広く行われていた時期である明暦三年に『嘲弄集』という守武千句をもとにした式目書を上梓したりしていることが知られている。ところで越智氏が言及されているこれらの俳書は京都の書肆から出版されたものである。つまり慶安年間を境に伊勢版の俳書は突然姿を消し、軌を一にして伊勢俳壇の俳書は、右のように京都の書肆から書名に「伊勢」を冠して出版されるようになるのである。この現象は伊勢の出版界と京都の出版界の間で、この慶安年間を境にしたあたりに、何等かの動き

があった可能性を示唆するものといえるのではなからうか。伊勢は古くから暦の印刷が行われているのであり、そのことは取りも直さず伊勢に印刷職人が存在していたことを意味する。筆者は以前、伊勢で暦を印刷していた職人が万治年間頃に江戸へ移住し、出版業に携わるようになった可能性を示唆するものとして次のような資料⁽³⁾に注目したことがある⁽⁴⁾。

新暦開板大経師為進止事天正勅裁嚴重之上近年忒令開曆之族有之由太以不可然早任先規可令停止彼輩之旨可令下
知給者依天氣執達如件

明曆三年十二月二日

大弁 在判

謹上 右少弁殿

右の文書は、新暦の開板は京都の大経師にのみ許可しているものであり、それ以外の者たちが開板することを禁止する旨の内容である。さらに、

洛中大経師三嶋曆之事大経師権之助可存知之旨従往古蒙勅許之処其後和州奈良勢州山田之曆師等猥致開板就令
売買板倉周防守遂穿鑿達叡聞之処自今以後曆之儀権之助可任指図之旨被仰出畢然此度亦望勅許之繪旨事甚以夷
曲之至也、依之奈良山田両所之曆重而被籠舎者也。然則曆之事如先規大経師権之助可為進退之旨依天下下知如件
明曆四年三月十六日
佐渡守判

という文書が続くが、これによって明暦四年に奈良と伊勢山田の暦師が許可なく暦の開板をおこなっていることに対し、両所の暦師が籠舎されたことが知られる。この事実は、奈良や伊勢山田の暦の印刷に携わっていた職人が、その渡世のよすがを絶たれたことを意味している。そしてこの明暦三・四年、即ち万治年間に入ろうとする時期は、江戸出版界において、主に物の本を出版していた京都の出店等の書肆とは一線を画す、娯楽に供するような本を出版する書肆が登場してきた時期でもある。これは、伊勢において暦の印刷で生計を立てられなくなった暦を作成する印刷職人が、仕事を求めて江戸へやってきた結果生じている事象ではないかと考えられる。とういうのも、こうした新興の書肆は、当時、江戸で伊勢商人が集住していた大伝馬町の周辺、大伝馬町三丁目や、隣接する通油町で営業を開始しているのである。このような江戸の状況と同様の理由で、京都出版界にも印刷職人が伊勢から流入したとしても不思議はない。この時期の書肆が「板木屋」や「表紙屋」などという職人的な屋号を有しているのも、そのような経緯を考えれば納得がいくのである。たとえば、後に俳諧専門書肆として俳書の圧倒的な出版点数を誇るようになる京都の書肆井筒屋庄兵衛は、現在判明している出版の上限が承応元年友直編『若狐』であるが、その刊記には「承応元年／極月吉日／寺町二条上ル町／表紙屋庄兵衛開板」とあって、当初庄兵衛が職人的な屋号である「表紙屋」を称していたことが知られている。その創業の時期も承応元年という、まさに慶安期までは行われていた伊勢の出版が一旦途絶える時期と重なっている。井筒屋庄兵衛を直ちに伊勢出身の書肆と断定するには資料不足ではあるが、上記のように伊勢で暦を印刷していた職人が糾弾されることで、伊勢において暦を印刷し、かつその他に俳書の出版等も手がけていたような印刷職人が、明暦年間前後に伊勢で生計を立てることができなくなった結果、京都にやってきて営業を始めた可能性も存することは指摘できよう。同様の事例として、井筒屋と同じ寺町二条上ル町で寛文年間から営業を確認できる俳書出版専門書肆の寺田重徳がある。寺田重徳は、自家で出版する俳書の版下にしばしば筆をとっていた

ことが知られているが^⑤、これも版下書きという職人的な技能を有する書肆とみなすこともできる。書肆寺田重徳の例も、俳書の出版がさかんになっていく先駆けとなった書肆が、印刷職人の出身である可能性をもつ例といえよう。また重徳は、延宝四年に『江戸／談林 誹諧十百韻』横本一冊を出版しているが、これは前年江戸で出版された田村松意らの『江戸／誹諧 談林十百韻』中本二冊（書肆名なし）を、書型を変えて出版したものである。おそらくこの京版は、重徳が勝手に江戸のテキストを利用したというようなことでなく、江戸で出版した書肆の了解のもとで作成された京版と考えられるが、この重徳の京版『江戸／談林 俳諧十百韻』の出版は二つの点で興味深い。ひとつめは、京版になる際に江戸版とは書型が変化しているということである。筆者は以前から、いわゆる江戸版と称される本の造本様式が一定していることの理由として、元版と外形的に異なるものになっていれば異なる本と認識するような、したがってそのことによって元版のテキストを利用することが許認されるような、今日とは異なる認識の仕方が存していたのではないかということを考えている。後年確立する板株の概念も、物理的に板木を所有しているということが重要な要件であり、単に抽象的なテキストを所有しているという感覚とは微妙に異なる概念なのである。つまり出版が開始した初期の段階では、物理的には存在しないテキストという抽象的なものを所有するという感覚に馴染むことができず、実体の存する「物」を所有するという、既に馴染んでいる感覚を何がしかのかたちで持ち込むことによって、テキストを所有するという感覚が成立していたのではないかと考えられるのである。そのため外形的・視覚的に異なるものになっていることが、元版を利用する条件になっているのではないかということなのであるが、この『江戸／誹諧 談林十百韻』は、いわゆる江戸版の事例とは逆に、江戸で出版された本を京都で出版したものであるが、書型を変えて他所で出版された同様の例といえるのである。ちなみに俳書で江戸版から京版が作成された例は井筒屋庄兵衛にもある。延宝四年江戸書肆上村利右衛門版『談林三百韻』が、後に刊年は不明だが井筒屋から版を

改めて出版されている。このことについて雲英末雄氏は「このように江戸版を京版に直すという事象は、さきの重徳における松意らの『談林十百韻』の例もみられて興味深いものがある。しかも同じ延宝四年に、江戸の松意らの選集が一方では重徳、一方では井筒屋によって京版に改められているのである。」と、この事象について注目しておられる。筆者は前稿において、万治・寛文期、古浄瑠璃はいわゆる江戸版とは逆に、江戸に作者が存在し、江戸から京都にテキストが提供されていることについて考察を試みているが⁽¹⁾、この事例は、延宝期には俳書が江戸から京都にテキストを提供している例としてとらえることができよう。さらに雲英氏は、寺田重徳が『江戸／俳諧 談林十百韻』出版の事例以外にも江戸と京都の俳壇を結ぶような出版をしていることについて次のように言及しておられる⁽⁵⁾。

当時の江戸俳壇は、延宝三、四年に京より移住した高野幽山や小西以春、それにすでに寛文末年に江戸に下つていた桃青らの上方来住の俳人たちが、いわば江戸はえぬきの俳人たちを圧倒しその主導権をにぎりつつあった。こうした時期に信徳や重尚、春澄があいついで東下し、上方来住組の俳人たちとしばしば交流して連句興行を行ない、連帯を強めているのは注目すべきことである。『江戸三吟』(延宝六年―筆者注)は三月中旬に刊行されているが、数ヶ月おいて夏には信徳は、門下の政定・仙庵と三吟百韻三巻を興行し、『江戸三吟』とまったく同じ書型で『京三吟』と題して八月に刊行している。これは明らかに意識的な行動と思われ、京と江戸とが相呼応し歩調をあわせて新風談林俳諧を推進させているものと考えられる。こうした動きに重徳は出版書肆という立場で、信徳に協力したものと思われる。

このように重徳は出版というかたちで、江戸と京都の俳壇の橋渡しをしているのである。この点が二つめの興味深い点である。俳書の出版における橋渡しといえば、専門俳諧書肆になっていく井筒屋庄兵衛も各地の俳壇の俳書が主に井筒屋から出版されていくようになることにおいて同様の役割を果たしている書肆といえよう。

井筒屋庄兵衛や寺田重徳という書肆も江戸の出版界と何らかの繋がりをもっていた書肆として位置づけられるとすれば、ここにも伊勢と京都と江戸の関係性を指摘できることになる。

さらに旧稿で指摘したように、延宝期に営業を開始する書肆西村市郎右衛門は、江戸の松会と何らかの営業上の結びつきを持っていたと考えられる書肆であるが⁽⁶⁾、この西村も俳書を多く出版した書肆として知られている。しかも西村は元禄五年以降、伊勢山田上一志町の書肆藤原長兵衛重常と相合版を出版するようになる。また江戸の西村半兵衛と相合で『二所皇太神遷幸要略』等、神道関係の出版も散見されることにおいても伊勢との関連を思わせる書肆である。そして松会も伊勢出身の商人であることは、以前報告した通りである⁽⁷⁾。ということは松会と西村は伊勢という属性においても共通点を有しているということになる。なおかつ西村は江戸において幕府御用達の紙問屋としてもその名を確認できる。元禄二年刊『江戸惣鹿子名所大全』に、「幕府御用達紙問屋／本町四丁目 西村市郎右衛門」と、また元禄十一年刊『日本鹿子』にも「江戸紙問屋 本町四丁目 西村市郎右衛門」と記載されている。筆者は前稿において「西村は京都の老舗の本屋に伍しての営業に苦戦を強いられて、さまざまな経営の可能性を模索しないではいられなかつたであろう」としたが⁽⁸⁾、むしろ西村市郎右衛門は伊勢と京都と江戸を結ぶ形で営業を展開しているとする位置付けの方が妥当なところであろう。

江戸と京都では、出版業界における画期が、京都では承応頃、江戸では万治頃と五六年のずれがあるが、それぞれに伊勢と関係する可能性のある動向として注目される。

江戸における絵俳書出版の嚆矢『誹諧画空言』

『誹諧画空言』（東京大学総合図書館酒竹文庫所蔵）は、いわゆる江戸版を出版する書肆、本問屋から出版された江戸における絵俳書の嚆矢である。大本一冊。最終丁ウラ匡郭外の左下に枠で囲って「江戸通油町本問屋開板」とある。序文の最後に「干時萬治三年臘月吉辰／高嶋氏／玄札序／荒木氏／加友撰」と記されている。撰者加友については、『俳文学大辞典』（平成7年10月、角川書店）に次のように解説されている。

誹諧作者。生没年未詳。万治〱寛文（二六五八〱七三）ごろ。荒木氏。別号泰庵。江戸両替町住。法橋位（『寛文比誹諧宗匠并素人名誉人』の医者。編著『誹諧画空言』は江戸版俳書の嚆矢。門弟に一貞・長時・正友・友徳らがいる。〔『貞徳誹諧記』〕。

この解説の情報は、上記の解説に示されている『寛文比誹諧宗匠并素人名誉人』に、「一 荒木法橋泰庵 別号江戸 加友」とあること、門弟については、『貞徳誹諧記』巻之下「諸国作者之系図」のなかの「江戸」の項に、「加友 一貞 長時 正友 友徳」とあることに拠っている。

ところで『俳文学大辞典』には、次のように、もう一人の「加友」が立項されている。

誹諧作者。生没年未詳。寛文（一六六一〱七三）ごろに六〇〱七〇歳で没か。別号、船舟庵・春陽軒。伊勢國松

阪樹敬寺の塔頭法樹院の住職。はじめ望一門、後に貞徳に従ったという。万治二年（一六五九）の『伊勢誹諧新発句帳』に三〇句、寛文二年の『伊勢正直集』に一二二句、同八年の自編『伊勢踊』に三〇句入集。『伊勢踊』の句引に「伊勢山田住」とあるので、寛文二〜七年の間に移住したか。

いうまでもなく、この加友は伊勢の人間として、江戸で『誹諧画空言』を編した加友とは別人と認識されているために、別に立項されているわけである。しかし、両者が別人か否かは再考の余地がないわけではない。両者とも生没年は未詳ではあるが、ともに万治・寛文頃活躍した俳人であることは共通している。また両者とも元をたどれば貞門であることも共通しており、両者を差別化しているのは江戸と伊勢松阪という異なる地の人間であること、職業が住職と医師という違いにあるのだが、後者の職業に関しては、江戸の加友を医者とするのは、おそらく『寛文比誹諧宗匠并素人名誉人』（文政十一年八月成、九代古筆了意編）に「法橋」とあることに拠るのではなからうか。この法橋位がもし本来の僧侶としての位であるとすれば、松阪と江戸の加友は同じ職業ということになる。残るは松阪と伊勢という所在の相違だけということになるが、この点については、伊勢の加友編『伊勢踊』（寛文八年五月刊、中野五郎左衛門版）の巻二に、「予一年江戸より帰国の春饒別有し方へ其返し／忘るなよ江戸ハ雲井の花の友 加友」という記載が存することが検討材料となる。一年はひととせ、つまり先年とか過去のある一年とかいう意味であるから、『誹諧画空言』が成った万治三年頃に加友が江戸に一時住していたとして矛盾はない。また、「帰国」という表現は短期の旅人としての滞在というよりは、しばらくそこに居住したことを思わせる表現といつてよからう。よって伊勢の加友は江戸に一時居を移したことがある可能性が出てくる。すなわち伊勢の俳人加友と江戸の俳人加友は同一人物である可能性も考えられるのである。加友の活躍していた万治・寛文期といえ、江戸に伊勢商人が多く流入し、

主に日本橋周辺で木綿業をはじめとする各種商売に着手した商人が少なくなかった時期である⁽⁸⁾。それに伴い、商人以外の職種の伊勢の人間がさまざまな理由で江戸にやってきたであろうことは想像に難くない。伊勢商人は、本拠地は伊勢においたまま江戸店を構え、奉公人は伊勢から連れてきて営業するスタイルが一般的であったという。そのような状況のなかで、僧侶である加友が江戸に一時滞留する何かの事情が存したことも考えられるのである。この問題については、同じく俳人である中田心友の例が参考になる。中田心友は、生没年は未詳であるが、寛文から延宝頃に活躍した俳人で、通称次右衛門、江戸の俳人調和の門人である。寛文六年一雪の俳書『洗濯物』に、「伊勢山田住心友」とあるのが俳書への初出とされている。寛文八年に調和が宗匠になった後にその門人となったようである。調和に師事したということは、江戸で俳諧活動をおこなっていた時期があるということであるが、延宝七年初春刊『伊勢宮箒』に出座して伊勢の俳人足代弘氏の判を得、続いて同年孟夏序刊『わすれ貝』の神風館俳諧の四歌仙にも出座している。一時江戸に住んでいたものの、延宝七年前には伊勢に帰郷し、伊勢俳壇の中心的存在である神風館の一員として活躍するようになったということであろう。他にも延宝七年宗臣編『詞林金玉集』に、中田心友について「元伊勢之住」・「後住江戸」という二通りの注記がなされている例もある。おそらくはまず伊勢で俳諧をはじめ、その後寛文から延宝七年前までは江戸で調和門として活動し、延宝七年前に伊勢に帰郷したと考えられるのである。もともと延宝八年序刊幽山編『誹枕』に「山田の心友奥州下向の時両吟所望に／伊勢暦みちの奥迄見られけり幽山」とあり、伊勢に帰郷後も奥州に赴いていることが知られるなど、帰郷後も伊勢に落ち着くような生活ではなかったらしい。というのは、延宝八年正月刊『江戸宮箒』は、江戸調和門の俳人と心友の唱和作品をおさめた俳書だが、おそらくは伊勢から奥州へ下向し、その帰途に江戸に一時滞在して成った俳書と考えられるからである。この延宝七年、心友の奥州下向について、島本昌一氏は、「中田家には中田孫太夫（友巳）の如き者もあつて、神宮と関係のあ

る職業的旅行であったと思われるが、俳風宣伝にも努るところがあったであろう。」⁽⁹⁾とするが、「神宮と関係のある職業」とは御師を想定しておられるのであろう。御師とは御祈禱師のことで、古くは平安末期から特定の信者と師檀関係を結び、それらの人々のために守札を配布、祈禱をするなどして、その代償として米銭などの寄進を得た神官や僧侶のことであるが、近世になると伊勢大神宮の御師は農民や商人層にまで伊勢信仰を持ち込み、伊勢へ直接参詣でさなない全国の信者のもとに出かけて行って祈禱大麻を配布したほか、扇・帯・茶・白粉などを土産として檀那に提供し、貨幣や米などを受け取っていた。そうしたことから次第に商人的色彩を帯びていったという。ちなみに伊勢暦は御師が白粉などの土産物同様、景品のように檀那に配布したものである。武藤和夫氏によれば⁽¹⁰⁾、

御師は下級神職であり、それは形式的には宗教的行為をなしていた一種の神職であるが、実質的には信仰の名をもつて商行為をなしていた前期的な伊勢商人とみるべきものである。(中略)事実、中世(天正)から福島みさき太夫の如く、双六の賽の座をいとなみ、或は松室子一太夫の如く米座をいとなみ、或は為替、両替などの商行為をなしていた者も多い。さらに「宇治山田」(伊勢市)で羽書を発行し、山田三方会合衆とか宇治年寄とかいう自治制度の中核体を組織していたものも、彼ら富裕な御師の一団であった。

つまり中田心友の如き例は、おそらく御師として実質的には商売のために移動する人物とみなすことができるのであり、そこに商業的なネットワークが存在していることが予想されるのである。たとえば上記の寛文八年五月刊加友編『伊勢踊』は、伊勢山田の俳人一一一人を中心に全国の作者数六一八人にのぼる俳諧選集であるが、このような選集の実現は、全国規模のネットワークの存在なしには成し得ないのであり、それが各地に出向く、なかば商人化した

御師によってもたらされたものであることはほぼ確実であろう。やや後年の例であるが、蕉門の徒である麦林舎乙由は中川氏、伊勢川崎出身で初め材木商であったが、後に神宮の御師になったという享保期の伊勢俳壇の中心的人物である。御師という職業柄もあつてのことであろうが、同じく伊勢の俳人涼菟などと北越などに赴いては歌仙を巻くなどの俳諧活動をしている。その乙由の享保六年の覚書に、

○木田善太夫殿より檀所への短尺六枚八月廿八日認遣候

○子ノ九月五日松村夜白頼高崎へ行代官持参いたす由四季之発句書付くれ候様に申候故左の発句遣候云々

とあることを岩出甫石氏が紹介されているが⁽¹⁾、これなどは御師の仕事を行ないながらそのネットワークを利用して俳諧活動を行っていることを如実に示す例であろう。このように神宮と関係のある職業、おそらくは下級神職である御師が俳諧を嗜み、その俳風を各地に広げたと考えなければ、何故伊勢俳諧があれだけの広がりをもせるのか説明がつくまい。既述の幽山の「伊勢暦みちの奥まで見られけり」という句も、心友の職業を背景に読まれた句といえよう。繰り返しになるが、伊勢暦は御師が檀那への贈りものとして配布したものである。このような例を踏まえれば、加友の場合も職業的な理由で江戸と伊勢を行き来していた人物である可能性は十分に考えられる。

したがって、もし江戸で『誹諧画空言』を編じた加友が、伊勢の加友と同一人物であるとすれば、当時主に江戸版を出版するという新たなコンセプトで営業を開始したグループの書肆である本問屋が出版した『誹諧画空言』は、伊勢（の人間）と関係のある出版物であるということになる。このことは江戸初期出版界において万治・寛文期に新たに登場してくる書肆が伊勢と関係をもっている一例と成りうる事例として注目されるのである。

ところで、これまでの考察をかんがみれば、商売上の理由で各地を移動する心友や乙由のような伊勢の俳人は少なくなかったことがわかる。そのような観点で改めて見直しみると、これまで「諸国を行脚する」というかたちで理解されていた俳人たちが、やや異なる色彩を帯びてくるのである。

行脚する俳人たち

たとえば、大淀三千風がその良い例であろう。大淀三千風は、寛永十九年生まれ、宝永四年没。伊勢國飯野郡射和の商家に生をうけた俳人で、名は友翰。本姓は三井氏である。父は作右衛門宗春という商人であるが、具体的な家業は不明である。十九歳で母を亡くし、二十四歳で父を亡くしてからは家業を継いだ兄を助けて商売に身を投じていた。後に天和三年から同七年まで全国を行脚した際の詩歌俳や文章を編した元禄三年刊『日本行脚集』巻一に、「予も十五年以前までは。毎年京大坂に在居せしかども。家業にせかれ。心ここにあらざれば天窓の上の山をも見ず。」と述懐しており、商売上の理由で京都や大坂に一時的に居住することを繰り返していたことが知られる。三十一歳のとき、雑髪して松島・仙台に以後十五年、俳人として居住することになる。三千風の俳人としての本格的スタートは、故郷を離れた陸奥の地においてということになる。この地で三千風は、西鶴が大坂で大矢数俳諧を興行したのに刺激を受け、仙台で矢数俳諧の記録に挑戦し、三千句独吟を達成するなどの活躍をみせ、仙台に多くの門弟を抱え三千風流の俳風を根付かせている。この三千風の仙台居住は、従来純粹に俳諧への熱意において実現したという理解がされてた。実際三千風自身も、

そもそも愚老は勢州の産にして今行脚の首途を奥州仙台より始めし因縁は、予十五歳の春より此の俳道にかたぶき日本修行の志ざし思ひいれ終にわすれずして、十五年前先づ松嶋の名高き景色を一見せめと当所仙府に縁を求めし

（『日本行脚集』巻頭）

と述べているが、「縁を求め」た先は、亀岡八幡の別当山本一笑亭という俳人であった。このような「縁」はどのようにして生まれるのであろうか。おそらくは三千風が商家出身であり、その商売上の伝手で仙台に同好の人間を探し得たというのが穏当なところであろう。家業が何かは不明ながら、既述のように若い頃に商売の関係で京都や大坂にたびたび赴任したというのであるから、仕事柄こうした関西以外の地にも各地にネットワークをもっていたとしてもおかしくない。というのも岡本勝氏によれば、三千風が出た三井家は最上に出店があり、その近くに三千風の兄と考えられる村川九兵衛自休が入婿をしているというのである⁽⁹⁾。何らかのかたちで奥州の地に縁がなければ、はるばる伊勢から入婿をするなどということは考えにくいのであり、おそらくは奥州は三井家の商売上、重要な位置を占める場所であったと考えられる。そうした家業がもたらした奥州との繋がりが基盤として存することで、はじめて三千風の仙台居住が実現したとみるべきではなからうか。三千風の俳諧における活躍は、その出自が伊勢の商人であったということを見直すことで、また新たなものが見えてくることもある。

こうした中央俳壇と地方を結ぶ俳人たちの活動については、雲英末雄氏が既に紅花商島田屋鈴木家三代目当主鈴木清風や岡山の晩翠について考察しておられる⁽¹⁰⁾。氏は「尾張鳴海の農業と酒造を業として庄屋も務めた千代倉下里知足や、大垣の船問屋谷木因等、地方の豪商家が西鶴や芭蕉をはじめ三都の俳壇に及ぼした影響はきわめて大きく、はかり知れないものがある。そうした交流はもつと注目され、重視されてしかるべきであろう。」と述べて、俳諧が

各地で展開する要因として、文芸そのものの力とは異なる視点からの考察の必要性に注目されている。移動する俳人についての考察も雲英氏の指摘に通底するものである。今後も「行脚する俳人」については考察を重ねて行かねばなるまい。

松会朔旦

最後に今ひとつ、江戸初期出版界と俳諧にまつわる事例を紹介する。初期江戸出版界の中心的書肆である松会についてである。書肆松会は、承応頃に営業を開始したと思われ、当初は主に京都で出版された本の覆刻や求板を行っていた。この時期は刊記に「松会市郎兵衛」と明記されており、初代が市郎兵衛という名であったことがわかる。万治・寛文期になるといわゆる江戸版を出版するようになるが、この時期は刊記に「松会開板」とのみ記されるようになる時期で、「市郎兵衛」と表記する本は一点も確認されていない。ちなみに寛文四年松会版『をんな仁義物語』・『真草』二行節用集』・『料理物語』、寛文十年松会版『つれづれ草』の刊記に「松会開板」と記された本が存するが、この表記が何を意味するのか、たとえば市郎兵衛の略なのか、「衛」という名前を意味しているのか等明確ではないが、いずれにしろ松会版が万治年間以降「松会市郎兵衛」と表記しなくなり、なおかつ出版の方法も求版や復刻をやめ、主に対象を仮名草子とする江戸版を出版し始めるといふ転換をみせているところから、松会は万治初年あたりに代替わりをした可能性が高い。おそらく例外として「松会衛」と表記される本の存在する時期も含めての、専ら「松会開板」という表記する本を出版する延宝期までが二代目の営業と考えてよいのではなからうか。貞享三年になると『兼好伝記』の刊記に「松会三四郎梓」という記載を見出すことができる¹⁴⁾。管見には入っていないが、これ以前に

貞享二年松会三四郎版『恋の息うつし』が存するという。いずれにせよ貞享年間は、いわゆる江戸版がほとんどみられなくなり、武鑑や塵劫記、節用集等の実用書が出版されるようになるという営業方針の変化が見られることもあり、代替わりして三四郎と名乗った時期と考えられる。おそらく三代目であろう。以後三四郎の名は世襲され、寛政三年まで出版界にその名を見出すことができるが、この初代三四郎の名が現れ始めた時期にあわせて「松会朔旦」という表記が散見されるようになる。管見では貞享五年刊『鼈頭節用集』の刊記に「貞享五戊辰歳七月吉日／松会朔旦開板」とあるのが早い例である。以後武鑑などにもたびたび朔旦の序文がみられる。厳密に言えば松会三四郎と松会朔旦が同一人物か否かを判別する手がかりはないのであるが、これまで「朔旦」は三四郎の雅号なのではないかと考えてきた¹⁵⁾。その問題を考える手掛かりとして今回見出したのが『丁卯集』大本二冊である。芳賀一品が江戸で一派を建立した記念の集で、書名から貞享四年に成立したと考えられる俳書である。首卷に一品と門弟五十人の発句が載るが、このなかに俳号が朔旦という人物の発句が掲載されている。この朔旦が松会朔旦である可能性を指摘しておきたい。『丁卯集』は、江戸初期の出版界で当初中心的書肆であった松会が、創業からやや時間が経過した時期ではあるが、俳諧と関わりを持っている可能性を示唆する資料なのである。

以上、近世初期出版界における伊勢と俳諧というテーマでいくつかの問題点を考察してみた。伊勢という地が近世初期の出版やその流通の問題を考える際に重要な役割を果たしており、そこに伊勢独特の風を守りながら展開した俳諧という文芸がさまざまな意味において作用し、化学変化をもたらした結果として近世初期の文学あるいは出版の展開を考えてみるという構図の設定も一考の余地があるのではないかと思う。

注

- (1) 柏崎順子「初期出版界と古浄瑠璃」(『言語文化』第五〇巻、二〇一三年十二月、一橋大学語学研究室)
- (2) 越智美登子「初期伊勢俳壇の問題」(『国語国文』第四三巻第十号、昭和四十九年十月)
- (3) 「諸家文書纂」(『明時館叢書』巻三) 所収。
- (4) 柏崎順子「初期出版界と伊勢」(一橋大学研究紀要『人文・自然研究』第六号、二〇一二年三月、一橋大学大学教育開発センター)
- (5) 雲英末雄「俳諧書肆の誕生」(『文学』第四九巻二一号、昭和五十六年十一月、岩波書店)。後に『元禄京都俳壇研究』(昭和六十年、勉誠社) 所収。
- (6) 柏崎順子「江戸版考 其二」(一橋大学研究紀要『人文・自然研究』第一号、二〇〇七年、一橋大学大学教育開発センター)
- (7) 柏崎順子「初期出版界と伊勢」(一橋大学研究紀要『人文・自然研究』第六号、二〇一二年、一橋大学大学教育開発センター)
- (8) 北島正元『伊勢商業と伊勢店』(昭和三十七年、吉川弘文館)
- (9) 島本昌一「江戸宮筥」(底本) 書誌および調査諸本」(第二期近世文芸類従古俳書編34 『富士石、江戸宮筥』、勉誠社、昭和五十一年)
- (10) 武藤和夫「伊勢商人の研究(一)」(『三重大学学芸学部教育研究所研究紀要』第三二号、一九六五年三月、三重大学)
- (11) 岩出甫石「伊勢俳壇神風館史」(『み裳すそ』神風館第十九世継承記念句集、一九五三年) 所収。
- (12) 岡本 勝「大淀三千風と仙台俳壇」(『近世俳壇史新攻』、昭和六十三年、桜楓社) 所収。
- (13) 雲英末雄「元禄京都俳壇と地方俳人」(『元禄京都俳壇研究』昭和六十年、勉誠社) 所収。
- (14) 松会版『あかし物語』は、「延宝九稔西九月上澣日／松会三四郎」という刊記を有するが、該本は延宝三年西村市郎右衛門の奥書を持つ『あかし物語』を延宝九年に梅村弥兵衛が求版し、それをさらに松会が求板したものであり、松会求板の際、

年記部分は梅村版のものをそのまま流用しているため、松会版『あかし物語』は延宝九年以降の出版ということになるので、『あかし物語』をもって松会三四郎出版の嚆矢ということとはできない。

(15) 柏崎順子「松会三四郎」(『言語文化』第三三三号、一九九五年十二月、一橋大学語学研究室)